

戦士

第1号

「戦士」編集委員会

戦士 第1号

1988. 7. 1 発行

目次

- ・「戦士」発刊にあたって 2
- 第1章. 単一の革命党建設の事業と結合せよ! 3
- 第2章. 党建設の事業と学生運動の結合を促進せよ! 8

「戦士」 発刊にあたって

我々は、87年12月発行パンフ「学生運動の階級的発展をめざそう！」において、現下の階級闘争—学生運動に対する、我々の原則的な態度を明らかにしてきた。ここで提出した我々の政治的態度を、革命的な単一の党建設の闘いと固く結合した、組織的活動として実践し結実させていくべく、この「戦士」の発行を開始する。

我々は、この「戦士」の継続的な発行をとうして、系統的な、理論闘争、宣伝・組織活動を展開していく。

学生大衆の種々の自然発生的な闘い・諸活動を、プロレタリアートの解放に向けた単一の闘いと、そのための強固な組織の建設へと結合させていくべく、我々は断固闘い抜いていく。

それは、自らを含め学生運動活動家を自覚的な共産主義者へと打ち固め

ていく闘いであり、ひいては、自己の活動を真に革命的な党の活動へと組織していく闘いである。

我々は、ここに、新たな組織活動に着手したことをきっぱりと宣言する。この闘いは、我々にとって、一つの飛躍を要する闘いとなる。我々は、この困難を、自らに課された任務として引き受け、進んでいくつもりである。この闘いのまえに、立ちはだかる一切の障壁・反動を粉碎し、乗り越え、その度に団結を打ち固め、隊伍を整えて、我々は自らの進路を切り開いていくであろう。

本号では、以下、現在の階級闘争・党派闘争の状況の中における、この我々の新たな組織活動の位置と意義について、提起していく。

一九八八年七月一日

「戦士」 編集委員会

第1章

単一の革命党建設の事業と 結合せよ!

階級闘争において、党建設、党の意識的活動・指導が不可欠であることは、ある意味では、すでに「前提」となっている。しかしまた、別のある意味においては、その「前提」は、全く無内容で形骸化し、實際上意味のないものになってしまっている。我々は、この「前提」を、真に有意義で、内容を持った、実際活動に意識的に貫かれていく実践の指針として、今日的に復権させていかなければならないと考えている。

【1】

現在、プロレタリアートの党は、著しくその権威を弱めており、影響力を後退させてしまっている。それは、歴史的に見れば、コミンテルンの変質・解体と不可分に結び付いたものであり、より直接的には、60年代末の国際的な階級闘争の高揚の波を、党の指導力がとらえきれず、むしろその中で、混乱と分解へと陥ってしまったことの結果として生まれている事態である。

我々は、70年代以来、直面し続けているこの事態を

前にして、あくまでも、党の権威の復権と影響力の拡大、その下への労働者・学生大衆の種々様々の自然発生的な闘いの統合という態度を、原則として堅持しぬき、この見地を実際活動に貫いていく。

そのためにも我々は、ここで、復権されるべき党とは、いかなるものなのか、という問題に対する我々の見解を明らかにし、現下の党派闘争に対する我々の態度を鮮明にしておきたい。

【2】

先に、党の権威・影響力の後退が、コミンテルンの変質・解体に、直接的には、60年代末の階級闘争の国際的高揚期における、党の指導の立ち遅れによって生み出されている事態であると述べた。コミンテルンは、レーニン・ボリシェビキ指導下のロシア革命の勝利を背景として、世界的な権威と指導力を有するものとして創出された。しかし、ロシア共産党の党内闘争におけるスターリン派の勝利は、この成果を、疑いもなく掘り崩すものとなった。ただしプロレタリアートはこのことを主体的な意味において把握しておかなければならない。というのは、スターリン派の勝利とは、同時に、真に革命的なプロレタリアートの側の立ち遅れを意味するものにはかならないからである。言い換えれば、スターリン派を根本的に批判し抜き、彼らの権威と影響力を解体し、一掃

していく闘いの立ち遅れが、スターリン派によるロシア共産党—コミンテルンにおけるヘゲモニーの掌握を許す根拠としてあったということである。

ここに表れた弱さを、切開し克服していく作業は、今なお、国際プロレタリアートにとって、重要な課題である。何故なら、60年代末の国際的階級闘争の高揚期における、党の指導の立ち遅れという事態の根拠もまた、このことと密接・不可分に結びついたものとしてあるからである。

【3】

周知のとおり、50年代末にスターリン主義に対する批判勢力として、いわゆる新左翼運動が、登場し、階級闘争の中において相対的に革命的な翼を形成してきた。フルシチョフによるスターリン批判以降、スターリン主義の「絶対的」な権威が後退していく中、これへの左翼的反対派としての新左翼は、労働者大衆に対する一定の影響力を築いていった。では、新左翼はスターリン主義と根本的に分岐し抜き、真に革命的な旗を掲げているのか、といえ、必ずしもそうではなかった。そのことは、60年代末の、階級闘争の高揚の中で、露呈するに至るのである。

60年代末階級闘争は、ベトナム革命戦争をはじめ、国際的な舞台において高揚を見せる。日本においても、

67年10・8以降、国家権力—機動隊との激闘が大衆的な規模において恒常的に展開されるようになっていく。こうした運動の高揚は、自然発生的にも国家権力の問題に突き当たっていく。したがって、この運動を領導しようとする革命党の側には、権力問題への解答—組織すべきプロ独の内実が鋭く問われてくる。新たな歴史を切り開いていく前衛階級としてのプロレタリアートの真の代表者として、革命的左翼が登場していけるのかどうか問われたのである。

この問題に最も意識的であったブントは、指導の転換をめぐって激しい党派闘争—党内闘争に突入していく。それは、まず、軍事組織の建設—武装闘争への着手をめぐって煮詰まる。と同時に、軍事を組織し、これを党の統制下においていく際の目的意識性が問われる。ここにおいて、何か観念的にプロ独一般を想定し、そうした「権力奪取」にむけた戦略・戦術（恣意的な道すじ—階級間の相互関係の将来への見とおし）をもって運動を指導しようとする力学主義的な戦術的態度と決別すること、そして支配階級としてのプロレタリアートの具体的方策としてのプロ独の根本的準備、という意識性を軍事・武装闘争の組織化にあたって厳格に貫いていくことが求められたのである。当時、ここにおける弱さは、武装闘争をめぐる、「革命戦争路線」・「前段階武装蜂起路線」等としての定式化という形で現れた。

こうした戦術上の転換は、国際主義の実践という見地

からも要請されていた。すなわち、当時の高揚せる国際階級闘争との結合にあたって、「一国革命から世界革命へ」といった道すじによって世界革命を把え、そうした位置から国際党建設の問題を実際には彼岸化し、階級闘争の国際的結合を部分的なものに押し込めてしまうような傾向と闘争していくこと、そして、あくまで世界革命——世界党建設という立場にたちきり、これを促進し実現していくという態度を、一国における権力奪取の闘いやそこにおける党の活動に刻印していく意識性を獲得することが求められていたのである。プロレタリアートの階級闘争が、形式上は、最初は民族的・一国的であるが、その内容においては国際的なものとしてあるということの意味を、かかる意識性においてつかみとらねばならない。

また、こうした戦術上の態度の転換は、階級対立の非和解性により根本的な把握、したがって資本主義に対する批判の深化によって支えられるものとしてあった。単に資本主義＝不当な搾取制度として告発し、資本家＝抑圧者、労働者＝被抑圧者という構図を描き出すにとどまるスターリン流の無内容で一面的な資本主義への批判ではなく、歴史的な運動としての資本の運動の世界史上の意義と限界を明らかにするなかでこそ、この資本の運動を止揚していく運動としての共産主義の内実と、そこにおいて唯一の前衛階級たる労働者階級の革命的性格を明らかにすることができるのである。

【4】

当時、これら階級闘争の逢着問題をめぐる党派闘争は、真に権威ある指導部としての単一党の建設に結実するに至りえなかった。そして、この60年代末～70年代初の闘いの地平——権力問題に直面し、軍事組織の建設と武装闘争への着手を実践の課題として突き付けた地平と、そこにおける逢着問題に向き合い、この逢着問題への革命的な解答をもって、新たな地平を切り開く新たな指導性を獲得することが、これ以降も引き続いて、革命的左翼たらんとするものの義務となったのである。

この課題は、長期にわたる苦闘を必要とした。70年代以降、階級闘争は混迷を強いられていく。もちろん、労働者大衆の種々の自然発生的な闘いは、不断に再生産されてきている。また、地域運動や住民運動・反差別闘争等が、一定の広がりを持続をもって取り組まれてきている。ただし、そうした様々な人民の闘いを、資本主義・帝国主義に対する、全面的で首尾一貫した、単一の闘いとして結合し領導していくプロレタリアートの意識性・指導性が大きく後退してしまっているのである。

この中で、指導の転換・新たな指導性の獲得という義務に無自覚なまま、あるいは、かつての闘いの地平を右翼的に清算することをおして延命してきた党派は、旧来の戦略・戦術主義の政治のもとでの大衆の自然発生性

へのすりよりと、困い込みに腐心しながら、破産を繰り返し、党の権威をおとしめている。中核派をはじめ、軍事組織の建設・武装闘争に意識的な部分も存在しているが、それは、戦略・戦術主義への接ぎ木という枠を超えて出るものとはなりえておらず、プロ独を根本的に準備していく、新たな指導性とその下での革命的な団結を創出することに失敗している。

【5】

真に革命的で権威ある、プロレタリアートの単一の政党の創建——これは一国的な舞台においてではなく、国際的な舞台において成し遂げられねばならない——という事業は、今だに未完の事業としてある。しかもこのことに自覚的な部分は、圧倒的に少数派でしかない。とはいえ、プロレタリアートが、自らを階級として組織し行動していくためには、さらにそれにとどまらず、自己を支配階級へと高めあげ、共産主義社会建設の前衛として登場していくためには、この課題は、絶対に避けてとおることのできないものとしてある。

全ての自覚的な活動家が、真剣に、この任務に取りくまねばならない。

我々もまた、自らをこの事業の担い手として打ち鍛えていく。そして、階級闘争の逢着問題への解答を、他でもなく党の綱領・戦術・組織へとつめあげ、これをもつ

て論戦・論争、党派闘争を展開し、全ての共産主義者・先進的活動家をこの下に統合していく闘いに結合していく。

第2章

党建設の事業と学生運動との結合を促進せよ!

【1】

党派の分裂・分立、権威と影響力の後退という事態と、学生運動も無縁では有り得ていない。学生運動は、諸党派の系列毎に分裂すると同時に、党派の指導から相対的に自立した無党派層の運動を生み出している。この構造は、固定的に再生産されてきている。

こうした学生運動の現状への我々の原則的態度は、党派闘争を促進し単一党建設の事業の前進を勝ち取っていくことであり、この活動への先進的な学生活動家の参加を促していくことである。このことが学生運動自体の発展を考えていく上でも、第一義的な課題である。

なぜなら、学生運動に現れた種々の路線問題（学園闘争と政治闘争の結合、学生運動と労働運動・階級闘争との結合、等々）もまた、かつての階級闘争の逢着問題と不可分に結びついたものであり、これへの革命的解答の地平をもってこそ、新たな展望を与えていくことが可能となるからである。

この革命的な解答は、何よりも党の側の指導・路線の

かかる活動を推進していく武器として「戦士」は発刊される。

我々は、この「戦士」紙上において、学生運動領域に現れた、諸党派の路線・指導の限界を暴露していくことを通じて、党派闘争をより全面的なものへと発展させていく。その際のポイントは、学生運動への指導方針を、あれこれの「学生運動論」として、なにか特別の理論としてまとめあげようとする傾向への批判である。現在、こうした傾向は、表面的にはそれほど前面には出ていない。ただしそれは、そうした論のたて方が有効性を持たないことを、理論的に対象化し、総括した結果としてあるわけではなく、むしろより経験主義の側へ落ち込んでしまっていることを意味しているにすぎない。したがってこれへの批判は現在の意義を有している。

こうした論のたて方が生まれるのは、権力奪取に向けた「みちすじ」とそこにおける学生の任務を、あらかじめ決まったものとして想定し、運動をこの型へとはめ込むことを、指導の内容とすることにもとづいている。これは、戦略・戦術主義的発想に貫かれたものとしてあり、実際的には学生のあれこれの自然発生性の現れ（急進性や労働者への贖罪意識、等々）を一面的表層的にとらえ、これへの拝跪とその困い込みを、理論的に取り繕おうとするものにはかならない。もとめられているのは、種々の自然発生性を、その根本において規定しているところの資本―独占資本の運動との相互関係においてとらえ、この資本の運動を止揚していく方向性（プロレタリアー

総括として取り上げられねばならない。学生運動の大衆的な発展は、不可避にこの路線問題へ突き当たるであろうし、逢着問題への解答をその指導的部分に要求して行くであろう。運動の大衆的な発展が、自ずと逢着問題への解答を提出するのではない。そうではなく、自ずと運動が発展すればするほど―これへの解答を切に要求するのである。ここにおいて、活動家にもとめられるのは、種々の自然発生性のまわりついた狭い位置とそこからくる狭い見地に自らを縛り付けることなく、より階級闘争全体をとらえる見地へと、したがってその組織的表現としての党の建設とそれとの活動という位置へと自らを立たせしめることである。

こうした活動の蓄積とその成果―革命党の権威の復権と影響力の拡大―のもとでこそ、学生大衆の様々な自然発生性と、深く、その根底から結びつき、これに拝跪するのではなく、これを真に革命的な側へと再編していく活動の現実的条件を広げることができようであろうし、そこから、学生運動の革命的発展と統一を展望し促進していくことが可能となるであろう。これによって、党の活動として集約されるころの、プロレタリアートの共産主義社会建設に向けた単一の事業へと、学生運動を接近・同調・結合させていかなければならない。

【2】

トの階級性）を、大衆の自然発生性の中に刻印していくことである。

そしてまた、こうした党派の指導の限界と破産との相互関係において位置をもっている、党派一般に対して否定的な傾向、さらには、無党派を立場化し美化しようとする傾向に対しても、その無力性を指摘していくことが必要であろう。もちろんその際、党派の側の（共産主義者を自認する側の）歴史的な限界を総括し、それにとつてかわる指導の内実を提示していくことが第一であり、その内容をもって、無党派を主義とする傾向の解体を促進していかなければならない。

【3】

こうした我々の見解を、今後、より具体的なものとして提起していくつもりである。その際、取り扱う領域は、①各々の党派の学生運動をめぐる路線の検討、②種々の闘争課題（日朝連帯運動・反天皇制運動・寄せ場連帯運動・三里塚闘争・教育学園闘争、等々）をめぐる我々の立場・政治的態度の提出、③戦後学生運動の歴史の検討、として整理することができよう。

全ての学生活動家の諸君。断固として、この我々の活動へ結果せよ!

階級闘争のただ中に、真に革命的な旗を打ち立てるために。

戦士 第一号

1988年 7月 1日 発行

「戦士」編集委員会